

平成 26 年 9 月 24 日

『黎明の日々を上梓して』

千葉黎明高等学校  
校長特別顧問 天野隆司

皆さんこんにちは。ただ今ご紹介頂きました千葉黎明高校校長特別顧問の天野です。宜しくお願ひします。先ず、日頃は、本校の学校運営に対し、ご協力・ご支援頂きありがとうございます。この場をお借りし御礼申し上げます。ロータリークラブの皆さんとの最初の出会いは、この本の写真集の中にも掲載させて頂きましたが、ご一緒に参加運営して頂き 2007 年 8 月に本校で開催された第 41 回インターアクト年次大会でした。その後も本校のお花を購入して頂いたり、本校インターアクトクラブをご指導・ご支援頂きありがとうございます。また、本日は、このような席にお招き頂き、『黎明の日々を上梓して』という題でお話しをさせて頂きます。ありがとうございます。

先ず、本題に入ります前に、簡単に私の経歴をご紹介させて頂きます。私は、昭和 27 年に徳川家康生誕の地、八丁味噌で有名な愛知県岡崎市に生まれ、その後岡崎市立葵中学校、愛知県立岡崎高校を卒業し、弁護士を目指し、名古屋大学法学部に入学しました。しかし、力及ばず司法試験に 2 度失敗し、産業育成を使命として 1902 年に設立された旧日本興業銀行（現みずほ銀行）に入行し、その後 32 年間銀行員生活を送り、西村理事長・校長に請われて、2007 年 4 月より昨年 3 月まで 6 年間本校校長を務め、昨年 4 月より校長特別顧問に就任しています。

これからお話しする『黎明の日々』は、昨年 5 月に出版の準備に取り掛かり約 1 年 1 か月、6 月 10 日に漸く完成し、千葉日報から出版しました。そして、6/15（日）の千葉日報朝刊の紙面（お手元に配布）でも大きく紹介させて頂きました。本の出版に当たり、本書の推薦文を書いて頂いた明石要一千葉大元教育学部長、現千葉大学名誉教授、現千葉敬愛短期大学学長を始め多くの方々の協力を頂きました。

さて、私は縁あって 7 年前に民間（銀行員）の世界から未知の教育界に飛び込みました。最初に人事部から「校長という仕事をやってみないか」と内示を受けた時はとてもびっくりしました。教育界に飛び込んだ詳しいいきさつについては、本書第一章に書かれていますが、一言で言いますと、社会人生活の最後に「これからは産業を育てるのではなく、人を育てる仕事にこれまでの経験を活かそう、人生最後の仕事として、社会貢献を果たしたい」と強く思ったことです。しかし、これまでの人生の中で、大勢の人前で話をするのは、中学生時代生徒会役員として全校生徒の前で話した時以来初めてのことでした。校長になって初めて知ったことですが、校長として人前で話をする機会は想像以上に多くありました。入学式、卒業式、全校集会という学校行事はもとより、部活動、PTA、八街市関連行事及び地域貢献活動など様々な場面を経験しました。一方、校長として、生徒、保護者の皆様及び本校関係者の方々に直接接する機会は限られていますので、挨拶は自分の思いを直接伝える絶好のチャンスと捉え、最も大切にしました。校長の仕事の 5 分の 1 程度を、挨拶の原稿作りに費やしました。そして、私は、教員免許を持っていないことから、32 年間の民間での様々な経験、2 人の子供を育てた父親としての経験、小さい頃からの人生経験に基づき、出来るだけ話をする相手の目線に合わせて、「豊かで有意義な人生を送る為のヒントとなるメッセージ」を伝え続けました。最初は、2007 年 4 月の始業式で最後は 2013

年3月の終業式でした。この6年間で、様々な多く人との出逢いがあり、様々な場面で民間人として私なりのメッセージを伝えることができました。

一方、2007年4月～2013年3月までの校長在任6年間は、少子化の進行、公立高等学校の授業料無償化、新型インフルエンザの大流行及び東日本大震災など厳しい環境下での学校運営の中で、全てを投げ出したくなるような状況に何度も遭遇しましたが、西村理事長・校長のリーダーシップの下、私を応援して下さる教職員、生徒、保護者の皆様、中学校及び地域の皆様、本校関係者の皆様の協力を追い風にして、改善・改革を進め、本校は大きく変化し、「より魅了ある学校づくり」を推進することができました。この中で特に印象に残っているのは、賛否両論が飛び交う中で、理事長・校長と2人で実現させた震災学習を目的に実施した東北への修学旅行でした。このように良いと思うことを迅速に実行できるのが私立高校の独自性であり、公立高校との違いです。特に、進路実績については、不況による就職難の中、内定率は3年連続98%、大学・短大進学率は30%前半から60%（普通科70%）まで上げることができました。大学合格先も、ここ数年で国立の筑波大学、千葉大学、茨城大学、首都圏主要私立大学として、早稲田、上智、東京理科、明治、青山学院、立教、中央、法政、東京女子大などの合格者を出すことができました。この結果、中学生、保護者、近隣中学校からの評価も年々高まり、少子化、公立高校授業料無償化及び経済不況の高まりという厳しい環境下で、千葉県の私立高校54校中約半数が定員充足を果たせなかったり、更に経営不安に陥る学校が出てくる中、2013年度の入学生を含め3年連続定員充足を果たすことができました。そして、改善・改革の過程においても私なりのメッセージを関係者の方々に伝えることができました。本書の題名『黎明の日々』はまさに熱い思いの6年間の軌跡をまとめたものです。

ここで最後の職員会議で教職員に残した私が大切にしてきました言葉をご紹介します。それは、私がこの6年間、大切にしてきた次の5つの心構えです。（1）最後まで諦めないこと（2）人の意見に耳を傾ける寛大なこころを持つこと（3）誠実さを忘れないこと（4）迷った時は『生徒・保護者にとってどちらが為になるか』で判断すること（5）明けない夜はなく、止まない雨はなく雨もいつか止み晴れの日が来ること、です。全てを投げ出したくなるような状況に遭遇した時にこの5つの言葉を思い出し、乗り越えました。

こうして過ごした6年間の教職員、生徒、保護者の皆様、中学校、地域の皆様並びに本校関係者の皆様に様々な場面で私が送ったスピーチ及び寄稿文は300以上となりました。単行本にするに当たり、300以上のスピーチ及び寄稿文すべてを何度も読み直し、スピーチ及び寄稿文をテーマ毎に並び替え、数を半分に絞り、更にそれぞれのメッセージに対し、当時の背景、自分の気持ち、生徒、教職員などメッセージの相手のスピーチ後の反応を回想した文章を新たに付け加え、物語性を持たせました。『黎明の日々』は、私の校長在任6年間で出逢った多くの方々への感謝の意味を込めて、「豊かで有意義な人生を送り、幸せになる為の応援歌」と「より魅了ある学校を目指して、改善・改革を進めた苦難の6年間の軌跡」（黎明イズム）をまとめたものです。

本書は大きく、第1章「伝統の黎明イズム」第2章「天野隆司メッセージ集」第3章「本という宝物」という構成となっています。

第1章では、「黎明イズム」について、私と西村理事長・校長が熱く対談しています。「黎明イズム」とは、厳しい経営環境の中で、本校が大切にしてきた考え方（2つの建学の精神、不易と流行）本校独自の改善・改革・学校運営などのことです。本校が生き抜いて来ることができた「秘密」がそこから紐解かれます。

第2章では、私の校長在任6年間の300を超えるスピーチ、寄稿文の中から、(1) 人生の応援歌として「豊かで有意義な人生を送る為のメッセージ」、「より魅力ある学校生活を送るためのメッセージ」、(2) 黎明イズムとして「より魅力ある学校つくりのためのメッセージ」、「本校のステークホルダー(保護者、同窓会、後援会、中学校、進路先、地域)に対するメッセージ」として、129のメッセージを掲載しています。

第3章では、私が校長在任6年間で「校長のお奨め本」として毎月生徒に紹介した80冊の中から45冊を紹介しています。

全ての章に共通するテーマは不透明・不確実な時代を「生き抜く力」です。現在、日本を取り巻く環境はますます複雑で厳しくなっており、私達は、不確実・不安定な時代に生きています。そのような状況の中を生き抜いて行く上で、本書が少しでも読者の皆様のお役に立てればと思いました。

出版して約3か月の間に、お読み頂いた方の中から約60名の方々から、口頭、メール、お手紙で、西村理事長・校長及び私に対して感想を頂きました。その中から、特に印象に残りました私の銀行関係者のお手紙を紹介させていただきます。その方お手紙の中で、「6年間で千葉黎明高校が着実に成長していく姿をしっかりと感じ取ることができました。そして、人を育てるというのは自分のDNAを後世に託せる点でとても素晴らしいですね。校長職は天職でしたね。」という感想を頂きました。一般的に人間がDNAを残すとしたら、自分の子供や孫にしか残せませんが、私達教育関係者は、教育という仕事を通じて、何百、何千という生徒に自分のDNAを残すチャンスがあるということ点で、教育という仕事は本当に大切に素晴らしい仕事であることをこの手紙を読んで再認識しました。この手紙は、先日の職員会議において教職員にも紹介しました。

最後になりますが、私は、この本の出版に当たり、在校生、卒業生、教職員、保護者の皆様並びに本校を応援して下さる全ての方々に「本校に対して更なる誇りを持って頂きたい」という強い思いをこの本の中に込めました。今日の私の話をお聞きになり、少しでもご興味・ご関心をお持ちになられましたら、是非一度お読み頂きたいようお願い申し上げます。そして、忌憚のないご意見を頂ければ幸甚です。本校の更なる発展に力をお貸し下さい。お願い申し上げます。以上で、私の話を終わります。最後までご静聴ありがとうございました。

以上